

カフカ再読のための試論 (1)

——解釈の不可能性と言語にとって不可能なもの——

木 下 直 也

カフカ研究の当初から現在に至るまで、変わることなくその関心の中心にあり続けたのは、カフカの作品には謎と言ってよい不可解な部分があるということであり、その謎にいかにかアプローチしてきたかの集積がカフカ研究史の総体であったととりあえず言うことができるだろう。その謎としての不可解な部分を、文芸理論との関係で、テキストにおける未決定部分をいかにか扱うかという視点との関連で「不確定箇所 Unbestimmtheitsstelle」(インガルデン)や「空白箇所 Leerstelle」(イーザー)に重ね合わせ、まずは、読者の位置や読むことの意味規定の問題に結びつけることができるだろう。このことは、同時にまた、テキストの解釈者の位置を問うことでもあり、つまりそれは、テキストに「内包された読者 Der implizite Leser」(イーザー)とそれに対して外在的な読者である解釈者(分析者/論者/研究者……など)との関係を問い直すことでもある。カフカのテキストが究めて自己言及的(self-referential)性格の濃いものであるならば、それについて論ずる者も、その自己言及性に対し上位(メタ・レベル)に立つことはできないにもかかわらず、とかく論者自体はその例外でありうるかのごとくふるまってしまう傾向があることは否定できないからである。要するに、この延長上の視座でまとめると、例えばある文学作品について批評することが、そのまま「文学とは何か、批評とは何か、言語とは何か」についての批評言語に反転してくるといった自己言及性の構造の孕む問題を考えることは、「書くことの不可能性」、「書かないことの可能性」(注29参照)という二重の否定的状態の中で書き続けた作家カフカ

においては、他の作家以上に、近現代の文学や言語をめぐるあらゆる問題をその臨界点において鮮明なかたちで引き寄せて来るということが言えるだろう。またそのことを踏まえた上で、カフカのテキストの特性それ自体についても検討を加えねばならない。なお、本論のタイトルに「再読」という一語を使ったのは、ニーチェの「永劫回帰」(ewige Wiederkunft) やキルケゴールの「反復」(Wiederholung) における様な意味での *Wieder-*の作用—歴史的、時間的前提与件を踏まえた上での「再度」ではなく、超越性を射程に入れつつ、常に現在のしかありえないカフカにおける書くこと、及びそうして書かれたテキストを読むことの相互作用に力点をおくためである。

I. 「空白箇所」と解釈者の位置

文学テキストが隔々に至るまで作者の統御下におかれてはいないというのは、今日では大前提として許容されるべき事柄となっているが、その考え方に基づく様々の文芸理論のうち、ヤウスの「受容美学」(Rezeptionsästhetik) とならびイーザーの「読書行為」(Der Akt des Lesens) 論は、作品への視線を、生産する作者の側から受容者の側へと移行させることで、文学テキストのとらえ方に新機軸を持ち込んだとされている。『行為としての読書』の序論は次のように始まる。

文学テキストは、読まれる時に初めてその作用 (Wirkung) を展開させることができるのだから、この作用の記述は、一般に読書過程の分析と一つである¹⁾。

読書によって、「空白箇所」は必ずしも充填される必要はない。むしろその「空白箇所」によって生ずる読書過程における「相互作用」(Interaktion),

1) Iser, Wolfgang: Der Akt des Lesens. München 1990 (UTB/Wilhelm Fink), S. 7.

そしてそれによる、持続的には確定されないような読みの変化がここでは重要なのである。従って、解釈に関してもこのように言っている。

(……) 作用理論は、個々人が読むことで意味を完遂させることの、及び解釈の相互的議論の可能性を基礎づける手助けをしなければならない。確かにそこでは、それらの歴史的限定性が現れるが、この限定性もまた、テキスト解釈の自閉性が終わったことに照準を合わせようとする確証から生じて来ている。解釈は、その受け入れやそれへの関心への反省なしにやっていくことはもはやできないのである²⁾。

従って、普遍的たらんとする解釈と同時に、一義的、専制的解釈も否定され、「テキストは読書過程で現実化される作用の潜勢態である」³⁾ のだから、歴史的条件を踏まえつつ、テキストは、その潜勢態における読書行為との間の作用運動に相応しく、無限の解釈の可能性を許容しているのであると言える。

こうした「空白箇所」や「読書行為」における「作用理論」、解釈の多様な可能性などの考え方は、例えばウンベルト・エーコの「開かれた作品」(opera aperta) の考え方にも共通するところをもっている。

まず第一に動的なものとしての<開かれた>作品は、作者とともに作品を作ることへの誘いによって特徴づけられること。第二に(……)すでに物理的に完結していながらも、刺激の総体を知覚する行為において享受者が発見し、選択するべき内的諸関係の絶えざる胚胎へと<開かれて>いる作品が存在すること。第三に、あらゆる芸術作品は、たとえそれが明示的であれ暗黙のものであれ、必然性の詩学に従って生産された

2) Ebenda: S. 8.

3) Ebenda: S. 7.

としても、実質的には一連の可能な読みの潜在性に無限な系列へと開かれており、その読みのそれぞれは、ある展望、ある趣味、ある個人的演奏＝上演に応じて作品を甦らせる、ということである⁴⁾。(傍点原著者)

すなわち、エーコの場合も、享受者、受容者と共に「作られる」作品の「動的」で「開かれた」、「潜在的に無限な」位相が提起されているのである。その後、「開かれた作品」という格好の根拠が「過剰解釈」(overinterpretation)を産んでいるために、新たに解釈を限定する諸条件や「理想的読者」や「経験的作者」の定義について検討を加えたりするに至ったという事情はあったが、それはさておき、一般的には、テキストは開かれたものでなければならず、解釈の可能性は無限でなければならず、それを満たす文学テキストこそが読書行為に値するものであるという見方は、今日では、イーザー、エーコのみならず、表向きにも、暗黙裡にも自明のこととして通っているかのように見える。そして、カフカの作品もその代表例として挙げられるわけであるが、果たしてカフカの作品は、それほど「開かれた」もので、「無限の解釈」を許容するものなのだろうか。このことを最初に提起した問題と一緒に考えてみることにする。

つまり、イーザーやエーコの理論は、ことカフカに対しては、必ずしも有効に機能しないのである。『内包された読者』『行為としての読書』『虚構的なものと想像上のもの』三作品をみてもカフカに対する言及が一度もないのは、扱っているテーマからしてさしあたり関連がないからだとか、イーザーがアングリストであるからだという理由からだけで片づけられないように思うし、カフカの場合には何か別種の審級を導入しなければならないか、あるいは論の一貫性がそこで破綻してしまう危険性があるために、

4) Eco, Umberto: Opera Aperta. Milano 1967 (Bompiani).
ウンベルト・エーコ『開かれた作品』篠原資明／和田忠彦訳(青土社 1997年) 66頁

敢えて言及を避けているととるのは余りに意地の悪い見方であろうか。一方、エーコの『開かれた作品』では、一箇所だけカフカに触れているが、その箇所を引用する。

すぐれて<開かれた>作品として、すぐさまカフカの作品のことを考えることができる。つまり、裁判、城、待機、判決、病氣、変身、拷問は、直接的な字義通りの意味で理解されるべきではないのである。だが中世の寓意的構成とは違い、ここにおいて重層する意味は、一義的に付与されていないし、いかなる百科事典によって保証されているのでも、いかなる世界秩序に基づいているのでもない。カフカの象徴についての、実存主義的、神学的、臨床主義的、精神分析的な多様な解釈は、作品の可能性のほんの一部を尽くすに過ぎない。つまり、事実上、作品は曖昧なものとして、無尽蔵の開かれたものであり続けるのである。というのは、普遍的に認められた法則により秩序づけられた世界に代わって、方向づけの中心の不在という否定的な意味においてであれ、もろもろの価値と確実性について絶えざる再検討が可能であるという肯定的な意味においてであれ、曖昧性に基づく世界が到来したからである⁵⁾。

ここで言われていることは、カフカの作品は「一義的」な意味付与の不可能な「曖昧性に基づく」「開かれた」ものであるということなのだが、この部分は教科書的要約のようであり、それが作品の実際の様相からは離れたものになってしまっているというのはエーコがカフカの具体的作品分析をしているわけではないだけに性急であるかもしれないが、この一節がカフカについて再三言われて来たことの同語反復に過ぎないという印象はまのがれえない。

では、カフカの場合は、その「開かれた」「空白箇所」は「読書行為」

5) 同書 45-46頁

あるいは「解釈」に対していかなる作用を及ぼしてきたのであろうか。ハイデガーは「現存在」の「世界内存在」としての「了解」Verstehen について次の様に言っている。

(現存在 Dasein が「存在可能」Seinkönnen のために存在しているという前提で／引用者)、

現存在が、その中であって自己指示 Sichverweisen の様態のもので、前もって自らを了解しているその場所は、前もって存在者 das Seiende を出会わせる拠り所である場所である。適在性 Bewandnis という存在の仕方⁶⁾で存在者を出会わせる拠り所となる場所である、自己指示的に了解することがその中でなされる場所が世界という現象である。そして、現存在が自らを指示する拠り所となるものの構造が、世界の世界性 die Weltlichkeit der Welt を形成するものである⁶⁾。(傍点原著者)

ハイデガーは「道具」(Zeug) 的性格をもつ「手元にあるもの」(Zuhandenes) には、向く (bewenden) 方向があり、それを「適在性」と規定し、「(それ) によって」mit、何か「(あるもの) のもとに」bei 向かうという関係を「指示」(Verweisung) と呼んでおり⁷⁾、「了解」の中では、前もっての「開示性」(Erschlossenheit) により「指示」作用が活動するとしている。そして、この「指示」作用が、自分自身の「ことを示す=意味する bedeuten」ことで、「現存在」は「世界」に「関与」(Bezug) するが、この「意味」作用のもつ「関与」を「意味指示性」(Bedeutsamkeit) と呼び、「意味指示性」により、「現存在」は自らがあるところの「世界」の構造を形成し、それ故「現存在」はその「有意味性」と「親しい」(vertraut) のであるとしている⁸⁾。つまり、「現存在」は、「存在可能」性の「開示」

6) Heidegger, Martin: Sein und Zeit. Tübingen 1993 (Max Niemeyer), S. 86.

7) Ebenda: S. 84.

のような、「現存在」に先行する何ものかにより「指示」の作用を呼び起こされ、その「指示」を「道具」的な媒介性をもった言語により行なうことで、「現存在」は「存在者」である「自己」として「世界内存在」(In-der-Welt-sein) となるが、こうした「意味」作用に「現存在」は、前もって(つまり、無意識的、必然的に)慣れ「親しんで」いるのだということが出来る。そしてこの「意味指示性」に、木村敏の論拠を借りて「欲望」の次元を読み込み(「離人症において失われているのはほかでもない、欲望としての自己である」⁹⁾)、さらにそこに、同じく木村の、「人間」を「人—の—^{あいだ}間」と読むこととを重ねれば、この「意味指示性」は、「関係性」から離脱しないように、「現存在」が「世界」へ「自己」としての「存在者」として超越することで、「存在」と「存在者」との間の「存在論的 ontologisch (= 関係的)」差異 (Differenz) を補填し、かつ更新していく「欲望」を内包した行為として読むことができる。木村の言うように、

すべての存在者は自己の存在可能にとっての「道具」として「……」のためという性格をおび、この「意味指示性 (Bedeutsamkeit) によって世界を構成しています。現存在が世界内存在であるというのは、それが自らの存在可能に関心を向けつつ、世界の意味指示性において存在者の存在を開示するという仕方で、存在者のもとに逗留しているということなのです。これが、「現存在の世界への超越」ということに他なりません¹⁰⁾。

さて、ここで次に、このハイデガーと木村の論を、先程からの「空白箇所」「読書行為」「解釈」などの問題群に結びつけて考えてみたい。ハイデ

8) Ebenda: S. 86f.

9) 木村敏『分裂病と他者』(弘文堂 1990年) 183頁

10) 同書 128頁

ガーのこの存在論的考察が記号 (Zeichen) と指示の関係、そして言^{ディスタール}説の発生場所における自己という主体と言語による意味生成について触れたものである以上、それが、テキストとその読者／解釈者の問題へと転位されることは言うを待たない。ハイデガー哲学は自身が「存在の解釈」であると呼んでいることから、「存在」の「解釈」自体が、そのまま「解釈」としては本質的にいかなる行為なのかという問題性を内在させていることもそのことの裏づけとなる。そして、さらにはまた、作品を閉じた自律的構造体として分析する立場は、メタレベルの分析者が不可能である以上、また作者をも締め出すわけにはいかず、テキストと作者、テキストと読者の相互作用を考えねばならないというのがイーザー、エーコに共通する立場だとするなら、テキストという一つの「世界内」で、「存在者」としての「読者」、「解釈者」や「作者」がいかに「関与」して来るかを検討する上で、ハイデガーの存在論を援用することは、あながち無意味なことではないだろう。bedeuten「(あることを) 指示する＝有意味化する」の一語には、deuten「解釈する」の類義が含まれていることにも注意せねばならない。つまり、「存在」それ自体から「存在」と「存在者」の存在論的差異が派生してくるが、「存在者」が、逆にその差異を同一化し「意味指示性」を賦与することは、「存在」を明らかにしようという志向のもとにあっても、かえって「存在」それ自体を隠蔽してしまう。即ち、それにより世界内に自己の成立（及び反復による習慣的定立への同一化）が確保されるからである。木村は言う。

厳密には自己でも自己ならざるものでもないどこかで、潜勢的自発性の現勢化が、或いは主客未分化の根源的一者の差異化が生起して、そこで分離生成した自己と自己ならざるものとのあいだに生じる非対称のために、この全体が自己の場で遂行されたかのような外見を呈するのである。(……) その差異化が自己の相のもとに遂行されなくてはならない

という保証はどこにも存しない。現に分裂病者では、この差異化が自己ならざるものの相のもとに遂行されていると言ってよい。ここから自他の非対称性の逆転といった事態も出てくるのである。私たちの患者が「トポロジー的な場の転位」という表現で言おうとしていたのは、ほかならぬこの差異化の場合の反転でのことではなかったろうか。この反転が通常は起らないで済んでいるのは、自己が新たに現勢化されるたびごとに以前の自己の主体性と固有性を継承し続けて、それによって自己の同一性が保持されているからである。

自己は恒常的な実体もしくは持続的な状態として同一性を保っているのではない。自己は繰り返り返し自己に立ち戻ることにおいて自己自身であることができる。自己は反復においてのみ自己の同一性を保っている¹¹⁾。
(傍点は原著者、下線は引用者による)

こうした「存在論的差異」をめぐる自己生成のプロセスは、「空白箇所」をめぐる解釈という「意味指示性」と解釈者の関係とパラレルである。本来は「存在」(Sein)は「存在可能」(Seinkönnen)に先行するにもかかわらず、「存在可能」が剥離すると、「反転」して今度は「存在」に先行することになる。同様に、ここで言われる「自己でも自己ならざるものでもないどこか」あるいは「主客未分化の根源的一者」は、テキストの「空白箇所」へとスライドすることで、「解釈可能性」となり、「意味指示性」＝「解釈」を誘発する装置として機能し始める。そして「自己」の成立のごとく「解釈者」の自己が成立すると、次にこの装置が持続的に機能し、自律的運動の慣性態を手に入れるために、その「空白箇所」と「解釈の多様性」を結びつける。そうすれば、解釈は無限に可能であり、「空白箇所」に解釈を代入し続けることが保証されるからである。(この点は、ハイデガーにおける他者とともにある「共同存在」Mitseinの「情態性」**Befindlichkeit**

11) 木村敏『自己・あいだ・時間』(弘文堂 1981年) 214-216頁

という用語が想起される。)「読書行為」が可能であるという前提を「反転」させることは、解釈者の自己を危機に陥れると同時に、テキストの「空白箇所」に裂け目を入れ、その隙間の奥のどこかに、フロイトのいう「無気味なもの」(das Unheimliche)を現出させかねない。ハイデガーの文脈で、「存在それ自体」に対応するような「明るく開か lichten れた」場所がスライドし「開かれた作品」におけるテキスト内の「空白箇所」が生じるとき、「空白箇所」は読みえない不可能性ではなく、埋まらないままに繰り返し読むことの可能性を解釈者に与えることになる。

II. カフカ研究における「解釈」の「多様性」と「不可能性」

しかし、カフカ研究の大筋は、初期の一義的解釈による意味規定から、多義的解釈の必然性、さらには解釈の不可能性へと向かい、いずれにせよこのことが前提となっていった経緯があり、つまり、意味の複数性、解釈の「多様性」より、「不可能性」の方に重心が移行してしまったように見えるのである。このことは、すでにエムリッヒのカフカ論(1958)でも暗示されていたことであった。

あらゆる解釈の可能性が開かれた (offen) ままである。そのどれもが、ある程度の蓋然性を保ってはいるが、一義的に確実な解釈は一つとしてない。(……) カフカの作品に特徴的なものは、まさしく、作品に現れる諸現象、出来事、語りの「背後に」、もはや一義的に規定可能な意味が確定されえないという点、つまりカフカの宇宙的なものは哲学的、神学的、あるいは一般的に世界観を示す概念言語ではもはやまったく翻訳しえないという点にある。(……) カフカの形象世界と、見たところ非本来的な彼の言葉は確かに依然アレゴリカルなものや寓話パラボリック的なものを含んでいるかのようである。しかしこのアレゴリカルなものや寓意的なものもはやシステマティックに概念化して解釈することができないから、

つまりは、厳密な意味では、もはやアレゴリーや寓話 (Parabel) が問題になってはいないのである。(……) それ故、アレゴリーや寓話の概念は、カフカの作品には、正当には適用できない。これらを用いることが混乱を生み、すでにきわめて不幸で馬鹿げた解釈の試みをもたらしてきた¹²⁾ (傍点原著者、下線引用者)

確かにエムリッヒは、「アレゴリー」や「寓話」としてカフカを読むことの限界を示し、一義的にカフカを読むことが、いわば「過剰解釈」を生んできたことを批判し、カフカ解釈の不可能性を提示しているかに見えるが、自らもまたその「不可能性」が常に「あらゆる解釈の可能性が開かれたままである」ことと一対になっていることに結局は依存して、その長い著作を成立させ、時にはかなり強引な解釈を試みているのである。つまりは、「作品」や「解釈」についての議論の状況は、それを論ずる際用の用語はより細分化されたとはいうものの、基本的に例えば、エーコ周辺で生じた「過剰解釈」をめぐる状況とさほど大きな違いはないように思われる。カフカの作品は、それに対する「あらゆる解釈が不可能である」(=「空白箇所」を埋めることは必ず断念へと追い込まれる)が、それとまた一見矛盾するようであるが、「あらゆる解釈の多様性を許容する」(=「空白箇所」を埋めようとするいかなる志向にも可能性を賦与する)。つまり、「空白箇所」は、解釈の「多様性」を許容するのみならず、同時に「不可能性」をも排除しないのであり、それは、「ナンデモアリエナイカラ、ナンデモアリウル」というかたちで、引用(11)で示したような意味で、無限に解釈者の自己の存在条件を、曖昧なまま延命させる自動装置となる。そこでは、「不可能である」という否定性と「多様である」という肯定的多義性とが楕円の様に二極をもつ構造としてバランスをとっており、解釈すること、読むことにとって本当の意味で不可能なものを、解釈行為における自己生成と

12) Emlich, Wilhelm: Franz Kafka. Wiesbaden (Athenaion) 1975, S. 76f.

発話の関係の中へ、巧みに隠蔽することで取り込んでいるのである。

しかしながら、解釈の「多様性」という「存在可能」に誘発されて「意味指示性」によって「存在論的差異」を代替していくという在り方は、その都度、形式化、構造化の果てに「不可能性」に出会うことで、この「不可能性」には隠蔽されたものがあること、及び自己生成と存在論的差異の慣性的様相に気づかされる瞬間に立ち会うことがありうる。ツヴェタン・トドロフはマルト・ロベールの、カフカの主人公と解釈者が同じ位置にいて、^{シンボル}象徴に意味を見いだそうとしては、欺かれ続けるという指摘を踏まえ、こう言っている。

カフカによって作品の中にすえられた寓意装置の明瞭性とそれが放つメッセージの不明瞭性とのあいだに、すなわち、すべてを寓意化しようとするテキストの誘発と意味を見いだそうとする語りの不可能性—後者が前者のメッセージとなる—のあいだに、いかんともしがたい対立というべきものがあり、それが解釈に際して根本的な当惑のもととなるのである¹³⁾。

言い換えれば、寓意性という多様なメッセージの可能性を内包しているように見えるものと、意味指示性とのあいだの対立が解釈の際の当惑を引き起こすのだが、その場合作品内部の主人公と作品外部の解釈者が、同一レベルにおかれていることに注意したい。このことは、カフカの作品が極めて自己言及的な性格を有していることを示してもいる。例えば、『木々』
»Die Bäume« のように多くの解釈者の分析対象となったテキストでは、語／文単位で前言が外部から変容させられていく様が見られるが、ここで

13) Todorov, Tzvetan: *Symbolisme et Interprétation*. Paris (Édition du Seuil) 1978.
ツヴェタン・トドロフ『象徴主義と解釈』及川馥／小林文生訳 (法政大学出版局 1989年) 107頁

は、むしろ、テキストと解釈者の関係において、外部にいる解釈者の言が、テキストそれ自体の内部に吸収されてしまうような様相について検討したい。G. ノイマンが「滑っていくパラドックス」Gleitendes Paladox という言い方で提示した『木々』における決定不可能性の背後にあるその「滑ってずれる」運動を超越的レベルとの関わりで考えるとどうなるか。柄谷行人はこう言っている。

タルスキーは(……) 価値判断(真偽の判断)を論理の体系の外にあるものと考え、価値判断の対象となる命題体系を対象言語、価値判断をふくむ体系をメタ言語とよんだ。しかし、いかに対象言語とメタ言語をわけても、メタ言語に対する再批判が必要となれば、さらに、メタ・メタ言語を設定しなければならない。こうした階梯化は、パラドックスを避けるために設定されたのだが、最初に生じた矛盾は、その矛盾を避けるためにつくられた段階の最後で、突如として再び出現してくるのであって、これを避ける方法はない¹⁴⁾。

ここで言われる「階梯化」やさらには無限の循環のイメージの喚起は、『木々』のみならず、『皇帝のことづて』»Eine kaiserliche Botschaft,«『掟の前で』»Vor dem Gesetz«などの名高い小品にも見られるものであるが、(「科学史あるいは思想史は」)、「それが対象とするものに逆に属してしまうのであって、それらはけっして外在的、あるいは“超越的”(メタ)であることができない¹⁵⁾という別の箇所と併せて考えてみると、「超越性」はそれが排除されているが故に「最後で、突如として出現してくる」ものだということになる。あるいは、ある言説において、実は解釈者の意識の中心にあり、同時に対象の彼方に意識されているものであるが、言説の渦中

14) 柄谷行人『隠喩としての建築』(講談社 1983年)100頁

15) 同書 97頁

にあつては、そうでないかの如く進行するように遠ざけられているものである。しかし、カフカのテキストは、もちろん形式主義的一貫性を目論んでいるわけではなく、超越性が避けられていたり、あるいは最後に出現してきたりする類のものではないのだが、解釈者がそこに形式主義的一貫性を構成しようかのように誘導してしまう性格をもつとは言えるかもしれない。この誘導は、前述したように、ハイデガーの用語での「明るく開くこと」(Lichtung)により現れる超越的な場所(「存在」それ自体、「本来性」Eigentlichkeit)が「開かれた作品」というテキストの「世界内」で、解釈者という「存在者」の「現存在の世界への超越」(引用(10)参照)のためのモーメントとなり、それにより超越性の位相がずれてしまうことを意味している。それ故に、解釈は「不可能性」という否定的超越性を象徴的に暗示する袋小路に突き当たるのである。だから、カフカの超越性は事後的に出現するものではなく、むしろテキストに同時に併存するものなのである。(11)の引用での、木村の「自己でも自己ならざるものでもないどこか」「主客未分化の根源的一者」という表現を借りれば、「解釈者(自己/主体)でも作品(自己ならざるもの/客体)でもないどこか」が超越性を措定する在り処であり、解釈者には、まずもって、このような思考の「反転」が要求されると思うが、しかし、実際はその「反転」は起こりえないために一なぜなら、木村の言うようにそれは離人症や分裂病患者に見られる性格のものなのであるから(引用(11)の下線部参照)一、通常はそこで生じかねない矛盾や亀裂を更に惰性態の中に救ってもらうことになる。木村が言うように、この「反転」が起これるとすれば、それは自己と他者の境界の消失にもなっていく。カフカに分裂病患者と共通の傾向を見ることに積極的な意味があるかどうかはここでは問わないが、ドゥルーズが文学や哲学における分裂病的エクリチュールをポジティブな世界への姿勢としてとらえたように、カフカのエクリチュールがそうした「反転」を最初から前提としているのは一となれば、それは自明であるわけだから、もはや「反転」とは言

えないことになるが一、例えば、有名なアフォリズム「君と世界との戦いでは世界を支持せよ」¹⁶⁾にも明らかである。そして、この「反転」を解釈者の側が身に纏えば、「解釈の不可能性」ではなく、「言語にとって不可能であるもの」による失語、無力感を伴い、その後の自分自身の言説のあり方（レトリック）が変更を余儀なくされることになるであろう。

Ⅲ. 偽装的エクリチュール

さて、カフカの作品における超越性の位相をずらす「誘導」的特性について触れたが、言い換えれば、これは「言語にとって不可能なもの」を「解釈の不可能性」へと移行させているのだと言える。以前用いた語を使えば、前者を *Nicht-Sprachliches*（非言語的なもの）、後者を *Unsagbares*（自己主体が言語表現をする上で言うことが不可能であるもの）という言い方で規定してもよい。そして、この不可避のズレを含む誘導的性格を、「偽装」「欺き」「嘘」といった言葉で呼ぶことができる。この偽装的性格はどのようなものであるかを提示するために、ここで次のベンヤミンからの一節を例として取り上げる。ベンヤミンは、ニーチェの『悲劇の誕生』の悲劇的神話の定義に対し、次のように言っている。

悲劇的神話は、この箇所です分に明らかになっているように、ニーチェには純粋に審美的な形成物として妥当なものであり、アポロ的及びデュオニソス的力の相剋は、同様に仮象と仮象の解体として審美的なもの領域に縛りつけられたままである。ニーチェは、人がともすれば悲劇的事象に課そうとした道徳性のおきまりの型から解放されるために、悲劇的神話の歴史哲学的認識の放棄を代償としたのである¹⁷⁾。

16) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, Kritische Ausgabe hrsg. von Malcom Pasley. Frankfurt a. M. (Fischer) 1993. S. 124.

17) Benjamin, Walter: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*. Frankfurt a. M. 1978 (Suhrkamp Tb.), S. 83.

さらには、アッティカ悲劇における「観衆—合唱隊—舞台」に関するニーチェの言及に触れながら、こうも言っている。

このようなアポロ的仮象の極端な強調、つまり審美的な悲劇の解消の前提条件は支持できない。「文献学的に言って、悲劇の合唱隊や祭祀とはいかなる結びつきをも（……）欠いている。」さらには、大衆であれ、個人であれ、恍惚としているものは、硬直していないならば、ただ情熱的な行為の中にいると考えられる。そこに慎重に熟慮して入ってくる合唱隊を、同時に幻影の主体としてとらえることは不可能であり、ましてや、自分自身大衆の現象であり、また他の幻影の担い手にもなれるような合唱隊など問題外である。何より、合唱隊と観衆とは、絶対に一体ではないのだ。」¹⁸⁾

この箇所を見る限り、ベンヤミンの論が正しいことは誰の目にも明らかである。実際「大衆の現象であり、また他の幻影の担い手にもなれるような合唱隊など問題外」であろうし、ニーチェは「このような（悲劇の罪と悲劇の贖いの理論を対決させるという）批判を怠ったために、彼には窮極的に悲劇の本質に関する決定が表わされる歴史哲学的あるいは宗教哲学的概念への接近から閉め出されたままであった」¹⁹⁾ というのもまさしくその通

18) Ebenda: S. 84.

19) Ebenda: S. 85.

引用(17)から(19)の延長で、もう少しこの点でのベンヤミンに関して補説しておきたい。恐らくはニーチェよりはるかに共感を寄せていたであろうカフカについては、ベンヤミンは、ここで論じたような、言説を變形／屈折させることの意味を見事に記している。

「僕らが彼の作品を、鏡のようにものを映すガラス板として受け取るならば、そんなふうにとっくに過ぎ去っているものになっている柱頭(Kapitäl)が、そのような描き方の本来の無意識的な対象として現れてくるかもしれぬことがあっても、それはもっともなことであるし、そうになったら解釈は、ちょうどその映されたモデルが鏡から離れているのと同じ分だけ、今度は作品

りであろう。では、これは、ニーチェの方が誤っているということで片づけてしまっている事柄なのだろうか？ ベンヤミンの「歴史哲学的認識」からの説得力に富んだ正しさは、その正しさ故に、かえってニーチェの隙だらけの無防備さを前に、その鋭い切先をかわされてしまっているような感があるのはどうしてであろうか？ それは、ベンヤミンが、悲劇的神話に関する認識の「厳密さ」と「粗雑さ」、「歴史哲学」と「審美主義」といった二項対立における前者を重視し、その視点からニーチェの悲劇論に正面から向かい合っているのに対し、ニーチェの場合は、たとえ最初は、厳密にギリシャ悲劇に歴史的位置づけを与えようとしていたのだとしても、

がものを映すことを反対の意味において求めなければならない。すなわち未来の中において。」

Benjamin, Walter: Franz Kafka: Beim Bau der Chinesischen Mauer. In: Gesammelte Schriften Bd. II-2. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1989, S. 678.

ただし、この「未来」(Zukunft)の一語は、

「生きている自然の中にも、生きていない自然の中にも、あるやり方で言語と関わっていないような事や物は存在しない、というのも、すべてのものにとっておのれの精神的内実を伝えようとするのは本質的なことだからである。(……) 言語とまったく関係のない存在とは一つの理念である」

Benjamin, Walter: Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen. In: Gesammelte Schriften Bd. II-1. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1989, S. 140f.

あるいは、

「(……) この哲学的普遍性は、本誌が真の哲学的アクチュアリティの意味を厳密に表示できる形式である。精神の生きている表現の普遍的妥当性は、それが生成している宗教的秩序の中に、ある位置を要求できるかという問いと結びついていなければならない」

Benjamin, Walter: Ankündigung der Zeitschrift: Angelus Novus. In: *ebenda*, S. 244.

という見解と結びついており、従ってそれは、ある時代の言語認識の極限の向こうの、鏡像のようにあったものと相似的でありながら、一新され、転位されたアレゴリカルな言葉が映(=移)される場所であるだろう。しかし、だからこそ、本論で扱う意味での非言語的なものは—それもまた言語との関係において生起するのだとはいえ—恐らくそこからは除外されている。

その非言語的な力—つまりはそれこそが、『悲劇の誕生』の副題の「音楽の精神からの」の意味なのだが—の沸騰により、ギリシャ悲劇がもはや語られる対象であることを止め、(つまりあった歴史でも、ありえた歴史でもなくなってしまう,)それを題材として演じられる、未来へと投影される孤独な言葉の現在の劇へと「反転」してしまったからなのである。その時ニーチェは、ギリシャ悲劇について語っているのではないし、たとえ固有名詞が現れるとしても、それは本来の歴史的な位置づけとしての意味を失っており、ニーチェによって作り変えられた名前として読まれねばならない。ニーチェはギリシャ悲劇の根底を流れる悲劇性を厳密な言語で後づけようとする以上に、自らの内からの非言語的なものの力(音楽?)にあまりに忠実であろうとするために、どこか芝居がかった逸脱を引き寄せてしまうのであり、だから、ニーチェがたとえ「美的現象としてのみ、存在と世界は永遠に正当化されるのである」²⁰⁾(傍点原著者)と言ったとしても、とてもそれをまともに受け取ることはできないし、認識の「厳密さ」と「粗雑さ」、「歴史哲学」と「審美主義」といった二項対立を超越した中空へ向けニーチェの言葉は発せられている。だから、ここでのベンヤミンが間違っているというのではなく、ベンヤミンはギリシャ悲劇の歴史的認識については、確実に正鵠を得ているのだが、ニーチェがギリシャ悲劇について語っているというのが「偽装」であるため、ここではベンヤミンとニーチェは接点を持ちえないのである。ニーチェのエクリチュールには、自己にも他者にも属さない、「存在論的差異」を超えた「存在」そのものである「主客未分化の根源的一者」へと無媒介に融合しようとする性急な願望が現れており、語られている対象であるギリシャ悲劇以上に、むしろそのエクリチュールのあり方自体が悲劇的なのだと言うこともできよう。ギリシャ悲劇にあった生気溢れる「いま・ここ」の現在性について語ろうと

20) Nietzsche, Friedrich: Werke in drei Bänden hrsg. von Karl Schlechta. Bd. 1. München (Carl Hanser) 1960. S. 40.

することが、「いま・ここ」で自分が語るという現在性へと反転してしまい、自らの口にする言語に強度による反復を与えるか（『悲劇の誕生』のデュオニソスや「根源的一者」*das Ur-Eine* に関する執拗な反復）、それが字義通りの意味で理解されないように偽装するかによって、非言語的なもののポテンシャルを維持しようとするのが、ニーチェにとっての自らの現在の歴史的把握からの必死の選択である。そして、その偽装が必ずしも意識的ではないからこそ（—むしろ意識／無意識の境界線上でと言うべきか—）、ベンヤミンほどの精緻にして独創的な精神をすらも、この場合に限っては真偽の二分法にこだわっているように見せてしまうのである。

これに似た例は、ブランショのカフカ論についての言及にも見て取れる。例えば、粉川哲夫は、ブランショのカフカ論が「でたらめなアプローチ」であり、それは「彼がカフカの作品とその環境世界とを通底する社会的身ぶりを了解していないからである。」²¹⁾（傍点原著者）としている。粉川はカフカの登場人物は「芝居がかっている」と指摘するが、しかし、それがそのまま「社会的身ぶり」なのではなく、むしろ、書くことはその意味するものばかりでなく、それ自体もまた「社会的身ぶり」に他ならないからこそ、言語に「社会的身ぶり」であると同時に社会化されない余地を残すために、「芝居がかった」屈折、変形を与えているのだと言える。先に検討したように「解釈」とは存在論的にも（またもちろん過去遡及的にも）ある距離を踏破することで「意味指示性」を与えていく行為であった。しかし、カフカのエクリチュール自体がこの「意味指示性」と戯れ、偽装し、逸脱することで「言語にとって不可能なもの」を現出させようとしているとするならば、解釈者も、時にはまたこの「アプローチ」（つまりは字義通りに、距離を縮め接近すること）自体と戯れ、対象から遠ざかる必要があるし（それこそまさに『城』のK. のとる姿勢なのであるが）、また、偽装した一見「でたらめな」言語によってしか現わしえない「正確さ」と

21) 粉川哲夫『主体の転換』（未来社 1978年）112頁

いうものがあるはずである。(一方、粉川では「でたらめなアプローチ」が正確なアプローチを前提とし、ともに二項対立を形成している。) デリダの言うように、「創造的想像力の作用を最も近くから把握するためには、だから、詩的自由の内部にある不可視のものへと眼を移していく必要がある。作品の闇の始源に、その夜の中で出会うためには、まず絶縁し (se séparer) なければならないのだ。」²²⁾ (傍点引用者) 確かにブランシヨのカフカ論には実証的には明らかに誤っている箇所を見いだせるが、その箇所は決してブランシヨのカフカ論を損なっていない。むしろ、それは、カフカという対象について書きながら、書くことが現在にのみ関わる行為であるため、知らずその対象から逸脱してしまう勇み足として捉えねばならない。ブランシヨの著作名に倣って、それを『踏みはずし』(faux pas 偽装した歩み) と考えれば、それは正誤の二元論の範疇からの規定をすり抜けてしまう。カフカの日記に見られる「G. の新たな攻撃」の G. はカフカの婚約者フェリーツェの友人 G (グレーテ)・ブロッホのことであるという実証的事実があるにもかかわらず、ブランシヨがそれを「神」Gott のことであると読み違えたことについて、平野嘉彦は「なんという錯誤。ブランシヨの神学的解釈における、カフカのテキストの『外部』とは、実はこのようなものだった」²³⁾と結論づけているが、これもブランシヨのその「踏みはずし」の罫に逆に陥っているように思う。こうした、ニーチェ、ブランシヨ、カフカのエクリチュールを特徴づける偽装は、必ずしも意図的であると捉える必要はない。例えばカフカは、「欺きなしに欺くこと」(Betrügen...ohne Betrug) という言い方をする²⁴⁾。カフカのエクリチャー

22) Derrida, Jacques: L'écriture et la différence. 1967 Paris (Éditions du Seuil). ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』若桑毅/野村英夫/阪上脩/川久保輝興訳(法政大学出版局 1977年)13頁

23) 平野嘉彦『カフカ 身体のトポス』(講談社 1996年)258頁

24) Kafka, Franz: Tagebücher in der Fassung der Handschrift hrsg. von Hans-Georg Koch, Michael Müller und Malcom Pasley. Frankfurt a. M. (Fischer) 1990. S. 839.

ルでは、「自己でも自己ならざるものでもないどこか」からの磁力の作用により、自己と他者の境界が曖昧になってしまい、従って任意の箇所の発語主体の帰属関係を問うことは無駄に終わる。自己固有の言語と思えたものが他者の言語へとすり替わってしまう状況で²⁵⁾、なおも自己固有のものを保持しようとするれば、偽装によって他者の言語を誘導し、非言語的なもの、言語にとって不可能なものをその外部に逃す他はない。「欺きなしに欺くこと」や「君と世界の戦いにおいては世界の側を支持せよ」といった表現はそのように理解できるし、そのように偽装された言葉に正誤の二元論を適用すると、「世界」という土俵での「戦い」の場では必ず勝利するが実は欺かれているといった事態を引き起こすことにもなる。

IV. 二項対立の失効と言語にとって不可能なもの

では、この偽装的エクリチュールの生成構造とその外部との関係はどうなっているのでしょうか。外部に立つはずの解釈者がテキスト内部に組み込まれてしまうような関係があるならば、それは、カフカのテキスト自体が引き寄せているのだと考えねばならない。そこで、本論の最後に、カフカのテキストの特性について考えてみることにする。柄谷行人はペレルマンの論理学に基づき、西洋哲学史の基本構造としての二項対立に触れ、例えば（副次的なもの／本質的なもの）という二項対立において、第一項で

日記のこの箇所は、法や罪の問題、長編小説との関係などを含んだかなり複雑な内容の部分なのだが、ここでは、その該当箇所だけを表記しておく。

「つまるところ、僕にとっては、ただ人間の法廷だけが重要なのであって、さらには僕はこの法廷を欺きたいと思うのです、むろん欺くことなしに。」

25) こんな断片がある。

「同じ人間の中に、客体は同一なのに、まったく異なっている認識がある。だからまた、同じ人間の中にいくつも異なった主体があると逆推論できるほどである。」

Kafka: A. a. O. (Nachgelassene Schriften II): S. 66.

「精神的な戦いにおいて、自己固有のものとは他者のものを区別することの（強すぎる語だが）無意味さ。」

Ebenda, S. 29.

生じたパラドックスを回避するためのメタ・レベルが第二項であり、プラトン以来の西洋形而上学はパラドックスを隠蔽する装置をそのように獲得することで、「決定不可能性」を排除してきたとしている。つまりそれは、[(第一項/第二項) 第二項] という構図であるが、また、「独創的思想」は、そしてまた、19世紀後半からの「形式化」は、その対立構図の逆転、つまり [(第二項/第一項) 第一項] としてあらわれてきたともした上でこう言っている。

それが、実存主義とよばれようと、構造主義とよばれようと、また当人がそのような名称を拒絶しようと、重要なのはそのような“逆転”ではない。むしろわれわれが問うべきなのは、いかにして“逆転”が可能なのかということだ。(……) プラトン以来の哲学は、たんなる二分法によるのではなく、この対立がもつ自己言及的なパラドックスを“禁止”するところにあった。しかし、それはけっして“禁止”できない、というのは、それは形式的にコンシステントであろうとするかぎり、「決定不可能性」におちいるからである²⁶⁾。

実際には、“逆転”する者たちは、結果的にべつの「第一項/第二項」という形態を作りあげてしまい、そのような“逆転”自体を可能かつ不可能にしている「決定不可能性」を排除してしまうのだ。形式/内容に対する“逆転”としての形式主義(内容/形式)が支配的になると—今日の修辞学^{レトリック}の復権そのものがその徴候にほかならない—、すでにその装置のなかで世界を基礎づける仕事がなされてしまうのである²⁷⁾。

先に述べたエーコの「開かれた作品」を柄谷が「閉じた」思考と見なすの

26) 柄谷行人 前掲書 118頁

27) 同書 90頁

も、こうした論拠からである。

多元的決定や構造的因果性は、上と下、前と後を鳥瞰しうるメタレベルによって可能なのである。したがって、オープン・システムやオープン・テキスト（ウンベルト・エーコ）なるものも、結局は閉ざされている。要するに、こうした考えは「内／外」，「上／下」，「前／後」という二項対立にもとづいており、そこから出ようとするかぎり、そこに内属せざるをえないのである²⁸⁾

では、ここでの第一項、第二項に a （肯定的命題）， \bar{a} （否定的命題）を当てはめてカフカの場合に援用してみるとどうなるだろうか。柄谷の言う“逆転”は、カフカ解釈の歴史的経緯という視点に重ね合わせてみると、 $[(\bar{a}/a)A]$ から $[(a/\bar{a})\bar{A}]$ というかたちへの移行として表記しうる。すなわち、二項対立的命題から一義的命題 A を導出するという肯定性から、同じく二項対立的命題から否定的命題 \bar{A} を導出するという否定性への「逆転」をカフカ解釈の展開のうちに認めることができる。しかしこの \bar{A} は、(解釈の)「決定不可能性」という「空白箇所」(解釈者により埋められることを誘発する欠如)であるが故に、 \bar{A} はあらたに (b/\bar{b}) という二項対立を生み出すことになる。そして (n/\bar{n}) へと至るプロセスの反復のことを「解釈の多様性」と言い換えることができる。しかし、ここでの「決定不可能性」は柄谷の言う「形式化が排除する決定不可能性」、つまり形式の外部になおも残る「不可能性」とは別のもので、むしろ「形式の内部」で発話を生起させる条件としての「不可能性」なのである。柄谷の言う「排除されている決定不可能性」は、「言語にとって不可能な外部」であって、それはむしろ、偽装されて形式の内部で常に $[(内部/外部)]$ の反転の機能を担うのである。だから、ここでさらに、 $[[(内部/外部) / 外$

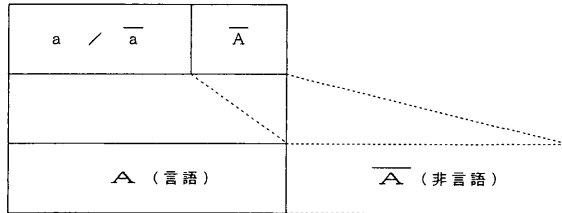
28) 同書 125頁

部₁] 外部₂] という構図をカフカの場合に当てはめることができよう。(混乱を避けるため、便宜上 1, 2 を付す)

実はこの [……] で表わされた部分は、[……] の構図内では自己と他者の言語が境界が曖昧になった世界で、もはや斜線/による区分が不可能な世界である。だから、それは「外部₂」との相応関係で「内部」とよんでもいいが、より正確に、かつ簡略化して言ってよければ、カフカの場合、偽装された自己の一つまりは他者の一言語内という領域 [……] には、その外部₂ から見たときには、実は二項対立はなく、ただ、[言語/非言語] という関係だけがあるのだと言ってよい。この構図を明確にするために図示してみる。

1 カフカ解釈
(ただしカフカの
テキスト自体が
この領域を含む)

2 カフカのテキストと
同時的な否定作用
としての外部 \overline{A}



下段2で横倍角の大文字で書かれた \overline{A} は「言語にとって不可能なもの」(外部₂)として上段1の「決定不可能性」 \overline{A} (外部₁)に対応している。 \overline{A} はここでは、肯定的命題を意味するのではなく、「決定不可能性」をも含めた上で、意味規定性の可能性の限界線が引かれる内部として肯定される言語それ自体を意味する。そして「言語にとって不可能なもの」(外部₂)が偽装してテキスト内で「決定不可能性」としての「空白箇所」(外部₁)へと位置をずらし、またこの外部₂の否定的磁力が、また[言語=テキスト]内部での二項対立をも偽装させるか、歪みを生じさせる。(ただし、ここで強調しておきたいのは、上図の1がカフカ解釈で、2がカフカの立脚点を表わしているのではない、ということである。カフカのテキストは、1+2であって同時に1をも含んでおり、従って、カフカのテキス

トは解釈というものを拒絶してはおらず、それどころかカフカ自身も時にそれに参与しているのだとせねばならない。つまりは、1+2の総和が一つの言説の複合体なのであり、「君と世界との戦いでは世界の側を支持せよ」というアフォリズムはそのようにも読まれうる。(ドゥルーズ／ガタリが、カフカに超越性を認めず、それを諸鎖列の機械状のシステムと見なそうとしているのも、何度も再浮上しかねない自己／他者を始めとした二項対立の構図を断ち切るところから始めるための戦略からであると理解しうる。ただし、超越性に関しては、本論では否定的ではなく、むしろ従来の意味でのそれに再検討を加える方向での視座をとっている。)

カフカは「書くことの不可能性」と「書かないことの不可能性」²⁹⁾をい

- 29) ドイツ語で書くプラハのユダヤ人作家の置かれた言語・文化状況の特殊性という前提で書かれている原典の該当箇所は次の通りである。

「彼らは三つの不可能性の中で生きていた（僕はただ、偶々言語上の不可能性とよんでいて、それはそうよぶのが一番簡単だからで、でもまったく違ったよび方だってありうるだろう）。つまり、書かないことの不可能性、ドイツ語で書くことの不可能性、別のように書くことの不可能性だが、四つ目の不可能性、書くことの不可能性をこれにつけ加えてもいいだろう。(……)」
Kafka, Franz: Briefe 1902–1924. Frankfurt a. M. (Fischer Tb.) 1975, S. 337f.

以下、この特殊な文学の実情についての記述が続く。確かに、この不可能性はこのプラハのユダヤ人のおかれた具体的特殊状況ぬきには語れない部分もあるが、日記、手紙、断片などを見ると、そして、共同体と個の関係についてのカフカの言及を考えると、この不可能性は、カフカ個人にとっての書くことの原理にまで拡張できると思う。つまり、個としての不可能性が特殊状況下の不可能性を内包させた構造を設定できる。

なお、カフカにおける、この点での、個とユダヤ共同体の関係については、拙論：縮小する地図—カフカの小文学 *kleine Literatur* について（『詩・言語』第22号、東京大学文学部『詩・言語』同人会 1984年）及び、1910–12年のカフカ (1)—「書けない」と書くこと、あるいは「力の過剰」*Überschuß der Kräfte*（同誌第23号 1984年）の第2章を参照のこと。

また、婚約者フェリーツェへの手紙にも同種の表現が見られる。

「(……) 日記の問題は、同時に全体 (*das Ganze*) の問題であり、全体のあらゆる不可能性を含んでいる。汽車の中で P. と会話しているときに、僕はそのことをよく考えてみた。全てのことを言うことは不可能であり、全てのことを言わないことは不可能である。自由を守ることは不可能であり、自由

わば書くことの基底においたが、すでにこの言い回しからして、単純な二項対立を形成してはおらず、二つの否定命題が相互に否定関係を形成するのではなく、歪んだかたちの対偶となっている。だから、この表現から導出されるのは「不可能性」ではなく、むしろ外部2に対応させて、「不可能性の不可能性」で言うべきである。こうした歪みは、例えば、小品『木々』»Die Bäume«において、ある言述にたいする否定が不可解に捻じれてしまう様に見てとれるが³⁰⁾、ここでは、カフカのエクリチュールの

を守らないことは不可能である。(……)」

Kafka, Franz: Briefe an Felice hrsg. von Erich Heller und Jürgen Born. Frankfurt a. M. (Fischer Tb.), 1976, S. 464.

以下、さらに生活の不可能性についての記述が続くが、ここでも、結婚という具体的な事柄を巡って不可能性についての記述がなされているように見えるが、それが「全体」の問題と関わる、つまりこの「不可能性」が隣接するあらゆる他の問題群にまで展開しうることが読み取れる。結婚の問題が権力 Macht の問題を引き寄せてしまうというカネッティの見方もこの点と関わり、またニーチェも次の様に言うとき同じ思考圏域の内にある。

「何かあるものがそれがあるようにとは違ったようにあるのを望むことは、全てが違ったようにあるのを望むことだ—それは全体を拒否するような批判を含んでいる……しかし生はそれ自体がそのように望むことであるのだ。」
(傍点原著者)

Nietzsche, Friedrich: Nachgelassene Fragmente, Herbst 1885 bis Herbst 1887. Berlin/New York (Walter de Gruyter) 1974, S. 324.

そういうわけで、この不可能性を軸とした用語法が、形式／内容どちらの面からも、とりわけカフカによって好まれたものであることが理解できる。さらには、今のカフカからの二番目の引用の記述が、日記という個人的なエクリチュールに関してのことから始まり、しかもそれが手紙によって相手に読まれることを前提としているという錯綜した関係のもとになされていることにも注意したい。

30) 『木々』のこの点の分析については、

Vgl. Neumann, Gerhard: Umkehrung und Ablenkung. Franz Kafkas »Gleitendes Paradox«. Stuttgart (Dvjs. 42) 1968.

Kobs, Jörgen: Kafka: Untersuchungen zu Bewußtsein und Sprache seiner Gestalten hrsg. von Ursula Brech. Bad Homburg 1970 (Athenäum).

三原弟平：「スライドするパラドクス—カフカにおけるイメージの変歪と現実」(『言語の冒険』講座20世紀の芸術5, 岩波書店 1988年)

西嶋義憲：「カフカの Die Bäume の構造分析の試み—テキスト言語学の視点

根底には、ただ【言語／非言語】という関係だけがあるということの例として日記からの箇所を引用しておく。

僕の力はどんな一文を書くにも、もはや十分ではない。そうだ、もし言葉が問題になったとして、一語を書きおくだけで十分で、しかもこの一語を自分と共に完全に満たし得たという平静な意識で脇を向いてしまうことができたらどうだろう³¹⁾。(傍点原著者)

今、夜中の二時に寝ようとする最も幸福な者であり、また最も不幸な者でもあるこの僕が包まれている特別な種類のインスピレーションは(もし僕がそれに関する思考にさえ耐えれば、もしかするとずっとなくなるにしろ、というのも、それはこれまでのどんなインスピレーションよりも高まったものだからだ)、一つの特定の仕事にだけ向けられるのではなく、僕にはすべてができるというインスピレーションなのだ。僕が無選択にある一文、例えば<彼は窓から外を見ていた>を書きつけると、その文はすでに完璧なものなのである³²⁾。(傍点原著者)

「完全に満たしえた」「完璧な *vollkommen* もの」という表現で、ある状況で発せられた言葉が、カフカ個人にとって何一つ付け加えるもののない完全さをもちうるものであることが言われている。そこでは、言葉が他者との関係(つまりはコミュニケーション)に入らない限り、偽装の必要も

から一」(広島ドイツ文学第4号 1989年)

日中鎮朗：「カフカの文学作品における論理構造—意味論から構文論へ—」(立正大学教養部紀要第20号 1986年)

とりわけ、『木々』をテキスト言語学、論理的に精密に分析している西嶋、日中の両論文からは、言語にとって不可能なものが、叙述形式との緊密な一体化を前提として語られねばならないと考える本論の趣旨にとっては大いに示唆を受けた。

31) Kafka: A. a. O. (Tagebücher), S. 140.

32) Ebenda: S. 30.

ない完全な固有性を獲得する。しかし、またなぜか彼は窓から外を見ていた>などという何の変哲もない文が「完璧なもの」なのであろうか。それは、その文が固有性のレベルでは、他者への意味伝達あるいは他者による意味の獲得以前の位相にあるからである。つまり、この一文はまだ何の意味指示性も胚胎していないか（だからこそ、その一文は「無選択」で構わないのである）、あるいは何か別の無 - 意味なものに包まれ、保護されている（だからこそ、ここで「インスピレーション」が問題になっているのである）。言語と非言語の幸福な併存へが固有の状況下という限定性のもとで可能になっているのである。カフカにおいて超越的なものの位置は、「意味指示性」の彼方の象徴としてあるのではなく、むしろその意味のベクトルを捻じり横滑りさせる行為が同時に伴う何ものかの運動と関連させねばならないのも、この【言語／非言語】の併存性によるのである。ハイデガーにおいては、「存在」「有」(Sein)は「存在者」の背後に有り、「存在者」では無いが故にまた「無」でもある。同様に、この一文の場合では、有である無が「存在者」としての言葉の背後に隠れることもなく、カフカの身体という場で、融和的に併存しているのであると言ってよい。（それが先程の図で示したような A と \overline{A} の併存の図式に相当する。）そして、その \overline{A} に超越性なき超越的作用としての身体のトポスを重ねるべきなのだが、本論ではそこまでは扱わない³³⁾。さて、では、その融和的併存の状

33) カフカに「超越性」を認めるかどうかは見方が異なってくるところであろう。本論でも、もちろん神学的レベルでこの語が使われているわけではなく、むしろ身体のトポスと結びついた、エクリチュールとともにある否定作用としての無の運動の謂として本論ではこの語を用いた。なおカフカにおける言語と身体性の離反関係については、次の拙論で分析を試みたので、ここではこれ以上扱わない。

Vgl. Die Polarität des Nichts – eine Betrachtung über Kafkas Welt- und Selbsterkenntnis. 弘前大学教養部「文化紀要」第30号 (1989年) S. 97–135.

さらに、ハイデガーの場合は、その「本来性」Eigentlichkeit や「存在者」から「存在」への帰郷を論点にすれば、ナチ問題も含めて明らかにカフカの場合よりは、「超越的な飛躍」に対し本気であるように見える。これはカ

態に、言語内部での解釈という外部からの他者の視点が入ってくると、どうなるか。いわゆる詩的言語のように、この一文は日常言語、流通する言語と一線を画すことで自己の固有性を主張しているのではなく、むしろ表面的にはもっとも非固有的な、すなわち一般的な伝達言語の意味のレベルと容易に同定される類のものであるが故に、それは読まれうるものと映るのであるが、しかし実際はそこに「言語にとって不可能なもの」の磁力が働いているために、その言葉は偽装されたものとなり、—『掟の前で』ではないが—誰にでも読めそうでいながら読みえないものとなるのである。あるいは、読ませることで文学言語が担いがちな固有の主張を一旦は放棄するように偽装するのだとも言える。こう考えると、一方で、深読みをして、

フカ以上に大きな問題であろうが、ここでは、エムリッヒのカフカとハイデガーについての箇所から引用しておく。エムリッヒはカフカとハイデガーの類似性のある程度認めながらも両者の違いを次のように表現している。

「従って、ハイデガーとは反対に、存在者から存在への移り行きも、まったく実現されえない。存在者からの跳躍といっしょに存在それ自体も消失する。カフカは存在に到達するには、すべての存在者だけでなく、存在それ自体をも無にしなければならない。このパラドックスの内に彼の無限定の倫理的リゴリズムの意味と徹底性がある。“真実の” *wahr* 存在が見てとれるようになったり、開示されたり、明るみに出されたり、露わにされたりなどする圏域はない。不壊の *unzerstörbar* 存在は絶対の要求であって、すべての存在を揚棄する要請である。ただ非在 *Nichtsein* としてのみ、定式化されるのを禁じられ、ただあらゆる存在者またそれとともにあらゆる存在の否定 *Negation* としてだけ自らを表わす純粋な“掟” *Gesetz* としてのみ、存在はそれ自身を明示する。(……) ハイデガーにとっては“無が無化する”ことが存在者の存在である。” *Das Nichten des Nichts ist das Sein des Seienden*. なぜなら、“空疎に” *nichtig* 存在する者の否定を生じさせる空虚さ *Leere* を無化することによって、ハイデガーは、存在者の中に隠れて“住んでいる”存在へと到達するからである。しかし、カフカにとっては、存在はすべてを無化するものである。」

Emllich: A. a. O., S. 60f.

ハイデガーについては、その哲学的展開のどの時期に照準を合わせるかによって、視点が変わるであろう。本論では、基礎づけの必要から、むしろ共通する部分に力点をおいて、つまりカフカに近づけたハイデガー読解の立場をとったが、エムリッヒのように徹底して両者の差異をはっきりさせる方が、あるいは、ハイデガーの言語否定的側面を薄め、逆にカフカの同面が強調されることにもなり、本論でのカフカの「非言語的なもの」*Nicht-Sprachliches* の作用という論旨を補強することができたかもしれない。

<彼は窓から外を見ていた>という一文について、窓という限定的に空間を区切るものとその外の無限定の拮がりや、文の中の文といった一種の入れ子構造に（ただし原文では訳の便宜上用いた記号< >はない）、意味レベルや構文レベルで示差的な線引きをしてみる誘惑が生じるが、これもまたカフカの罫にはまることかもしれない。なぜなら、この一文が「完璧なもの」であるのは、それが解釈不可能であると言うことをも不可能にする地点で成立する性質のものだからである。先に私は、果たしてカフカの作品は「開かれた」もので、「多様な解釈」を許容するものなのであろうかという問いを設定したが、むしろここでの文脈に従えば、むしろカフカの作品は、柄谷がエーコの「オープン・テキスト」は「閉ざされている」と規定したのとは全く逆の位相で「閉じた」ものであると言うべきであろう。いや、むしろそれは、「開かれた」「多様な解釈」の対象となることを、自ら予め前提とした上で、いかに「閉じる」か（あるいは「開かれる次元」をずらすか）までをも視野に入れた作品である。いわゆるカフカの M. プロートへの遺言に関する問題もそのように考えられる。つまり、焼却は「閉じる」行為であるが、同時に作品が「開かれた」場合にも「閉じられる」余白が前もって書き込んであるのである。それ故、最後に再度確認しておきたいのは、本論で意図したことは解釈批判ではないということである。そうではなく、作品というものに対峙したときに、解釈は不可避な行為、手続きであるが、同時にその解釈を横滑りさせる位相があり、それによって解釈者の言語まで余儀なく変形、歪曲を迫られる地点があるということを強調したいのである。（だから、本当は、問題にせねばならないのは、解釈の不可能性に突き当たったことによる断念や失語の先にあるはずの解釈者自身の蒙る書き方^{エクリチュール}の変容なのであるが。）

本論は、カフカのテキストを解釈する／読むとはどういうことかということについての基礎づけの試みであったので、あえてカフカの作品からの引用は最小限にとどめた。こうした基礎論を前提として、個別的、具体的

テキスト分析はなされるべきだと考えるからである。また、本論で扱った偽装や、言説レベルでの自己と他者の逆転の問題は、50年代の F. バイスナーに始まり、60年代 M. ヴェルザー、W. クツス、I. ヘーネルなどに引き継がれて、カフカ論の流れの大きな一部を占めてきた語りのパースペクティヴ論と結びついた解釈不可能性の視点とも密接に関わっているが、それらの主題群については再度扱う予定である。

最後に、今のカフカの「完璧な一文」とそれと同時的にある「言語にとって不可能なもの」(無)の併存とはどのようなことかを表わすのに相応しいデリダの一節を引用し、本論を終える。(ここで言われる「全」le toutが上記カフカの用語では「完璧なもの」, 「本質的な無」rien, 「純粹不在」l'absence pure が「非言語」あるいは「言語にとって不可能なもの」に対応し、そして「無それ自体が消失していくことによって自らを決定するその様態」とは、「決定不可能性」の袋小路でなおも、その言語にとって「対象たり得ない」「本質的な無」をいかに語るかということに関わっていることに注意したい。)

実際、ここで問題なのは、非場 (non-lieu) でも別の世界でもなく、またユートピアでもアリバイでもないある場所に向かっていく、世界の外への出口なのだから。それはルッセがフォションから借りた言葉に従えば《この宇宙につけ足されるある宇宙》の創造、したがって全に対するつけ足りをしか意味しないもの、ここから発してすべてが言語の裡に姿を現わしたつくり出される本質的な無だ。そしてまた、ブランシヨの声が、深奥からの懇請をこめて、それこそが書くことの可能性であり、およそすべての文学的靈感の可能性であることを、われわれに想起させるものなのだ。ただ一つ、純粹不在だけが(ある物の不在というのではなく、およそ一切の不在がそこで告げ知らされるあらゆるものの不在だけが) 靈感を与えることができる。(……) 文学のあり場所としてのこ

のような空虚—批評はこれを自らの対象がもつ特性として、そしてその周辺で人が語り続ける特性として確認すべきなのだ。そして批評の固有の対象とは、無が対象たり得ない以上、むしろ、こうした無それ自体が消失していくことによって自らを決定するその様態であることになる³⁴⁾。
(傍点原著者、下線引用者)

《付記》

本論は平成10年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。

34) デリダ 前掲書 14-15頁